

トラークル研究

第十一号

トラークル没後 100 年

及び

トラークル協会設立 20 周年記念特集号

2014 年 10 月

トラークル協会

〒270-0122 千葉県流山市大畔 237-3 三枝紘一方

Tel 04-7150-5782 Eメール saegusakouichi@yahoo.co.jp

目次

1. 序言	
2. 論文	
1. 伊藤 卓立：トラークルの詩「途上にて」(Unterwegs)の最終行 „Laß, wenn “ について -翻訳・誤解・誤訳-	1
2. 三枝 紘一：トラークルの Poetik 序説 -その稿体における語の変更から見たメチエ	26
3. 高橋 喜郎：トラークルの詩における silbern の用法について	45
4. 保坂 直之：連作構造から見たトラークルの『カスパー・ハウザーの歌』	54
3. 随想	
(1) 石橋 道大：「トラークルのゆかりの地を巡る旅」	77
(2) 伊藤 卓立：「トラークル協会のこと」	78
(3) 植和田光晴：「今後とも心すべき問題点」	79
(4) 三枝 紘一：「これからの研究の方向」	79
(5) 高橋 喜郎：「トラークルの詩に出会って」	80
(6) 保坂 直之：「オーストリアのトラークル」	82
4. 会の沿革	83
5. 活動報告	89
6. お知らせ	90
7. 編集後記	90
8. 会員名簿	91
9. 協会会則	92

トラークルの詩「途上にて」(UNTERWEGS)の最終行

„Laß, wenn“ について

— 翻訳・誤解・誤訳 —

伊藤 卓立

I

パリ東洋言語文化研究所教授 R・シフェールは、日本を代表する伝統芸能である能とその文化の翻訳に関して、欧米の言語・文化を明治維新以来翻訳し続け、翻訳に対して言わば鈍感になっている日本人にとって、注目すべき発言を次のようにしている。

フランス語系の一般民衆、もっと広範囲に見て、ラテン語系のひとたちが、どのようにして能のメッセージを受け取るか、という対照文化論的な方法による研究がなされなければなりません。・・・日本側ではあまり問題にならない場合でも、わたしたちフランス人にとってはかなり大きな現実問題になるからです。英語系の人たちのために、また、その人たちによって作られた情報は、殊に文学、美学に関する場合、ラテン文化系の一般民衆にうまく受け容れられず、ましてや解釈のされ方に至ってはなんともひどいものです。・・・英訳をフランス語にすると、必ずと言ってよいほど失敗に終わります。ところが、仏訳からスペイン語に、あるいはイタリア語に、ポルトガル語に翻訳した場合、また、ルーマニア語にした場合でも、本質的なものを失うことなく、翻訳が可能なのです。¹⁾

すなわち、英語もフランス語も共にインド・ヨーロッパ語族に属し、地理的にも近隣であり、歴史的にも文化的にも長いこと関わり合ってきたのにもかかわらず、ゲルマン語派の英語をロマンス語派のフランス語に翻訳をすると、その翻訳は「本質的なもの」を失うことになり、「うまく受け容れられず」、「失敗に」終わる、と R・シフェールは言っている。シフェールのこの見解に従えば、ドイツ語で書かれているトラークルの詩を日本語に翻訳することは、同様にトラークルの詩の「本質的なもの」を失うことになり、「失敗に」終わる可能性が非常に高い、と言える。しかしそれ以上に、日本語はインド・ヨーロッパ語族と、そして、ゲルマン語派のドイツ語と言語的にも文化的にも本来全く関連がないので、フランス語と英語の間に横たわる以上の、翻訳不可能な乖離がドイツ語と日本語の間には存在し、精神活動の総体としての文化²⁾のこの乖離が日本人によるトラークルの詩の理解と翻訳をさらに困難なものにし、時には誤解・誤訳の原因になる場合もある。

そこでこの小論では、トラークルの詩「途上にて」(Unterwegs)を取り上げ、そのような誤解・誤訳を正して、トラークルの詩的世界の理解にささやかな寄与をしたい。

II-1

先ず、論述上の必要性から、多少長くなるが、ここで詩 „Unterwegs“ の全文を引用し、問題の箇所を太字とアンダーラインによって明示しておく。また、後に必要になるので、登場人物に関わる語には全てアンダーラインと番号を付しておく。

- Am Abend trugen sie¹ den Fremden² in die Totenkammer;
Ein Duft von Teer; das leise Rauschen roter Platanen;
Der dunkle Flug der Dohlen; am Platz zog eine Wache³ auf.
- 5 Die Sonne ist in schwarze Linnen gesunken; immer wieder kehrt dieser vergangene Abend.
Im Nebenzimmer spielt die Schwester⁴ eine Sonate von Schubert⁵.
Sehr leise sinkt ihr⁶ Lächeln in den verfallenen Brunnen,
Der bläulich in der Dämmerung rauscht. O, wie alt ist unser⁷ Geschlecht.
Jemand⁸ flüstert drunten im Garten; jemand⁹ hat diesen schwarzen Himmel verlassen.
- 10 Auf der Kommode duften Äpfel. Großmutter¹⁰ zündet goldene Kerzen an.
- O, wie mild ist der Herbst. Leise klingen unsere¹¹ Schritte im alten Park
Unter hohen Bäumen. O, wie ernst ist das hyazinthene Antlitz der Dämmerung.
Der blaue Quell zu deinen¹² Füßen, geheimnisvoll die rote Stille deines Munds,
Umdüstert vom Schlummer des Laubs, dem dunklen Gold verfallener Sonnenblumen.
- 15 Deine¹³ Lider sind schwer von Mohn und träumen leise auf meiner¹⁴ Stirne.
Sanfte Glocken durchzittern die Brust. Eine blaue Wolke
Ist dein¹⁵ Antlitz auf mich¹⁶ gesunken in der Dämmerung.
- Ein Lied zur Gitarre, das in einer fremden Schenke erklingt,
Die wilden Hollunderbüsche dort, ein lang vergangener Novembertag,
- 20 Vertraute Schritte auf der dämmernden Stiege, der Anblick gebräunter Balken,
Ein offenes Fenster, an dem ein süßes Hoffen zurückblieb -
Unsäglich ist das alles, o Gott, daß man erschüttert ins Knie bricht.
- O, wie dunkel ist diese Nacht. Eine purpurne Flamme
Erlosch an meinem¹⁷ Mund. In der Stille
- 25 Erstirbt der bange Seele einsames Saitenspiel.
Laß, wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt.³⁾

日本人にとって詩 „Unterwegs“ (途上にて) における難解な語法は、最終行の „Laß, wenn“ である。その問題点をまとめると、次のようになる：

- 1) „Laß“ は自動詞か、それとも他動詞か。自動詞だとすると、„von Alkohol lassen“ (酒を絶つ)、または „die Eltern wollen, daß ihr Sohn endlich von dem Mädchen läßt“ (その娘と別れる)⁴⁾ のように前置詞 „von“ を必要とするが、見当たらない。それでは他動詞なのか？
- 2) 他動詞だとすると、4格目的語はどれか？やはり見当たらない。
- 3) 命令法 „Laß“ の発話者は誰で、誰に命令しているのか？
- 4) 従属接続詞 „wenn“ はどのような意味内容なのか？

これらの疑問を解くために、先ず歴代の邦訳を参照したい。その際に、„Laß, wenn“ に相当する部分は太字にし、アンダーラインを付けておく。

- 1) おお、今宵は何と暗いのだろう。僕の口許で
紫焰は消えた。しじまの中で
不安な心の淋しい弦楽が絶える。
酒に酔うて頭を溝に落としても 手を触れずにいておくれ。⁵⁾
(吉田・高本訳、1959/1967年)
- 2) おお、今宵はなんと暗いことか。
明かりもわたしの口のそばで紫となって消えた。
不安な魂のかなでる孤独な楽の音も沈黙のなかで死に絶えてゆく。
酒に酔いしれて頭が溝に突っ伏してもかまわないでくれ。⁶⁾ (平井俊夫訳、1967/9)
- 3) ああ、この世の暗さ。深紅の炎が
ぼくの口で消えた。静寂の中で
不安な魂のさみしい絃の調べがたえる。
酒に酔い頭が溝に沈んでも、そのままに。⁷⁾ (ホルムート・栗崎・滝田訳 I、1967)
- 4) ああ、この世の暗さ。深紅の炎が
ぼくの口で消えた。静寂の中で
不安な魂のさみしい絃の調べがたえる。
酒に酔い頭が溝に沈んでも、そのままに。⁸⁾ (ホルムート・栗崎・滝田訳 II、1985)
- 5) おお 何とこの夜は暗いのだろう。深紅の炎が

ぼくの口のなかで 消えた。静けさのなかで
不安な魂の 孤独な弦の音が 消える。

そっとしておいてくれ、葡萄酒に酔いしれて この頭が下水に沈んだとしても。⁹⁾

(中村朝子訳 I、1983)

- 6) おお 何とこの夜は暗いのだろう。深紅の炎が
ぼくの口のなかで 消えた。静けさのなかで
不安な魂の 孤独な弦の音が 消える。

そっとしておいてくれ、葡萄酒に酔いしれて この頭が下水に沈んだとしても。¹⁰⁾

(中村朝子訳 II、1987)

- 7) おお この夜の何と暗いこと、深紅の炎が
私の口もとで消えた。静寂の中で
不安な魂の孤独な弦の音は絶える。

酒に酔い頭が溝に沈むなら、それもいい。¹¹⁾ (瀧田夏樹訳、1994)

II-2

上記の7種類の邦訳中で、瀧田(1994年)訳以外全てにおいて „wenn“ は「も」を用いて訳出されている。そこで、国語辞典を繙いてみると、「も」は、「譲歩または許容する意、あるいは条件をしめす」、¹²⁾と説明されている。それ故、瀧田訳以外の種類の邦訳において、この „wenn“ は「認容」を示している、と解釈されたことになる。

唯一の例外は「なら」を用いて訳出している瀧田訳である。国語辞典を繙いてみると、「なら」は、「(指定の助動詞ダの仮定形)・・・であったら」、¹³⁾と説明されている。それ故、瀧田訳において、この „wenn“ は「仮定」を示している、と解釈されたことになる。

そこで、独和辞典を調べてみると、「認容」と「仮定」を示す „wenn“ の用法の説明はほとんどの辞書に存在する。¹⁴⁾ それ故、「も」も「なら」も翻訳の許容範囲内にある可能性はある。しかし、事実を「みとめゆるすこと」¹⁵⁾を意味する「認容」と、「事実とは無関係に想定されること」¹⁶⁾を意味する「仮定」との間には歴然として大きな差異がある。それ故、ここには誤解・誤訳の可能性がある。

II-3

次に „Laß“ を検討したい。ところで、ホルムート・栗崎・滝田訳 I と II で使用されている邦訳は全く同じなので、両者を一つと見なしたい。また、中村訳 I と II も、同様の理由から、一つと見なしたい。すると、„Laß“ の邦訳として使用されている日本語は次の5種類になる。

- 1) 「手を触れずにいておくれ」(吉田・高本訳)
- 2) 「かまわないでくれ」(平井訳)
- 3) 「そのままに」(ホルムート・栗崎・滝田訳Ⅰ・Ⅱ)
- 4) 「そっとしておいてくれ」(中村訳Ⅰ・Ⅱ)
- 5) 「それもいい」(瀧田訳)

そこで、これらの邦訳の意味合いを理解するために、次に国語辞典を参照したい。

i) 吉田・高本訳で使用されている「手を触れない」：

「手を触れる」は国語辞典にそのまま掲載されていないので、「手」と「触れる」に分解して調べる。

i-1) 「手」：

- a) 「人とかかわりあい、交渉、関係、縁。」¹⁷⁾(日本国語大辞典)
- b) 「かかわりあうこと。交際。関係。」¹⁸⁾(広辞苑)

i-2) 「触れる」：

- a) 「ちょっと関係する。」¹⁹⁾(岩波 古語辞典)

これらの辞書の説明に従えば、「手を触れずにいる」は「人とかかわりあわない」ことを意味することになるが、「かかわりあう」対象の「人」は、最終連において「私」以外に登場していない。それ故、「酒に酔うて頭を溝に落としても 手を触れずにいておくれ」という邦訳において、吉田・高本は、私が「酒に酔うて頭を溝に落としても」、この事実を「認容」して、そんな私と「かかわりあうな」、そんな私を「放置しておいてくれ」(Laß)、と解釈したことになる。

ところで、瀧田以外は吉田・高本も含めて全員 „wenn“ を、事実を「みとめゆるすこと」を意味する「認容」と理解したのであるから、詩人は直前の、「僕の口許で／紫焰は消えた。しじまの中で／不安な心の淋しい弦楽が絶える」、という抽象的・詩的表現に続けて、詩想上の関連を無視し、唐突に、「酒に酔うて頭を溝に落とし(た)」泥酔者の姿、換言すれば、酔っ払いが人事不省になって下水溝に頭から落ちた事実を描写し、それ以上のことは言っていないことになるが、これは、普遍化、抽象化、精神化 (unpersönlich, universal)²⁰⁾を良しとしたトラークルの詩の解釈としては、写実主義的過ぎ、陳腐な解釈である。

しかしいずれにせよ、吉田・高本の解釈に従えば、他動詞 „Laß“ の4格目的語は、「私」、即ち、「詩中の主体」(das lyrische Ich)になる。すると、「Laß」と命令を発しているのは誰か、また、「Laß」と命令されている二人称単数は一体誰か、またという疑問が残る。

ii) 平井訳で使用されている「かまう」：

- 1) 「①かかわる。関係する。②世話を焼く。もてなす。気をつかう。」²¹⁾(広辞苑)、

2) 「あることに、特に心を向ける状態にある、特に関心を持つ気持ちをいう。関係を持つ。関係がある。関知する。また、こだわる。気をつかう。干渉する。助詞『に』を伴って、「・・・にかまふ」の形で多く用いられ、また、多くは下に否定の表現を伴う。」²²⁾
(日本国語大辞典)

これらの辞書の説明に従えば、平井訳で使用されている「かまわない」は、吉田・高本訳で使用されている「手を触れない」と解釈上ほとんど同じであり、「放置しておいてくれ」と換言することができる。それ故、命令法 „Laß“ の解釈に関して平井訳は吉田・高本訳の結論と同じことになるので、最終行に関して平井の解釈はやはり陳腐である。また、この解釈でも命令法 „Laß“ の発信者と対象者も同様に不明のままである。

iii) ホルムート・栗崎・滝田訳 I・II で使用されている「そのままに」：

「そのままに」は国語辞典にはそのまま掲載されていないので、「そのまま」と「に」に分解して調べる。

iii-1) 「そのままに」：

- a) 「状態に変化のないこと。あったまま。」²³⁾ (広辞苑)
- b) 「『名』前からある状態のとおり。あるがままの状態。ありのまま。・・・源氏宿木、『そのままに、まだ精進にて、いとどただ行ひをのみし給ひつつ、明かし暮らし給ふ』」²⁴⁾ (日本国語大辞典)

iii-2) 「に」：

- a) 「(格助詞) 状態を示す。」²⁵⁾ (広辞苑)

『広辞苑』の説明に従えば、格助詞「に」は「状態を示す」のであるから、「そのままに」は「あるがままの状態に」を意味する。そして、「あるがままの状態に」「放置」することは、「人とかかわりあい」を持たないことを意味する。それ故、命令法 „Laß“ の解釈に関してホルムート・栗崎・滝田訳 I・II は、結局吉田・高本訳、及び、平井訳と意味内容的には同じになり、最終行に関して平井の解釈もやはり陳腐である。また、この解釈でも命令法 „Laß“ の発信者と対象者も同様に不明のままである。

iv) 中村訳 I・II で使用されている「そっとしておいてくれ」(=そっとしておく)：

- 1) 「何かの影響を与えるような言動をつつしんで、そのままにしておく。」²⁶⁾ (日本国語大辞典)

この辞書の説明に従えば、「そっとしておく」は「そのままにしておく」、すなわち、「かかわりあわずに」、「放置しておく」と換言できる。それ故、命令法 „Laß“ の解釈に関して中村訳は、結局吉田・高本訳、及び、平井訳と意味内容的には同じになり、最終行に関して中村の解釈もやはり陳腐である。

v) 瀧田訳で使用されている「それもいい」：

この場合、「それもいい」という形で辞書には掲載されていないので、「も」と「いい」に分解して、調べる。

v-1) 「も」：

a) 「讓歩または許容する意、あるいは条件を示す。」²⁷⁾ (広辞苑)

v-2) 「いい」：

この場合、『広辞苑』によると、「いい」は、「よし」の口語「よい」の転、²⁸⁾と説明されているので、「よし」、または「よい」で調べる。

a) 「よし」：「同意する。承認する。①差しつかえない。・・・『帰ってもよい』」²⁹⁾ (広辞苑)

b) 「よい」：「【五】同意できる。承認できる。①許される。差しつかえない。許可できる。かまわない。よろしい。・・・青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬとも与斯(ヨシ)」³⁰⁾ (日本国語大辞典)

瀧田訳で使用されている「それもいい」は、「『いい』は、『よし』の口語『よい』の転」、という『広辞苑』の説明に従えば、『日本国語大辞典』に掲載されている例文「・・・も与斯(ヨシ)」と全く同じ用法になる。また、すでに上で明らかにされたように、瀧田訳では „wenn“ に導かれた副文を「仮定」を示すと解釈したのであるから、瀧田はこの1行を、「仮定」ではあるが、「酒に酔い頭が溝に沈む」ことになっても、それを「許可する」、「承認する」、あるいは、それでも「かまわない」と解釈したことになる。それ故、瀧田訳では、他動詞 „Laß“ の4格目的語は「それ」、すなわち、„wenn“ に導かれた「仮定」の副文それ自体、あるいは、その内容、ということになる。この点、他の邦訳者達の解釈とは異なる。しかし、瀧田訳でも、命令法 „Laß“ は一体誰に向けられているのか、同様に不明である。

II-4

以上の歴代の邦訳をまとめると次のようになる：

1) „wenn“ が「認容」を示す、とする解釈：①吉田・高木訳、②平井訳、③ホルムート・栗崎・滝田訳 I・II、④中村訳 I・II。

„wenn“ が「仮定」を示す、とする解釈：①瀧田訳。

2) „Laß“ を「酒に酔って下水溝に頭から落ちてても」(伊藤試訳)、俺(詩中の主体)を「放置しておいてくれ」、とする解釈：①吉田・高木訳「手を触れない」、②平井訳「かまわない」、③ホルムート・栗崎・滝田訳 I と II 「そのままに」、④中村訳 I と II 「そっとしておく」。

3) „Laß“ を 仮に「酒に酔い頭が溝に沈むなら」、「承認する」、「かまわない」(それもいい)、とする解釈：①瀧田訳。

ここにおいて明らかにされた問題点は次のようになる：

- 1) 他動詞 „Laß“ の 4 格目的語は、「詩中の主体」(das lyrische Ich) なのか、それとも „wenn“ に導かれた「仮定」の副文なのか、あるいはそのほかの解釈をしなければならないのか。
- 2) 命令法 „Laß“ は一体「誰から」「誰に」向けて発せられているのか。
- 3) „wenn“ は「認容」を示すのか、それとも「仮定」を示すのか。また、„Laß“ の 4 格目的語たる名詞的用法の副文になることができるのか。あるいはそのほかの解釈をしなければならないのか。

III

上で明らかにされた問題を解決するための参考として、„Laß, wenn“ という組み合わせをトラークルのそのほかの作品に探してみると、唯一詩 „An den Knaben Elis“ の中に見いだされる。その第二連は次のようになっている。

Laß, wenn deine Stirene leise blutet

Uralte Legenden

Und dunkle Deutung des Vogelflugs.³¹⁾

詩 „An den Knaben Elis“ はトラークルも相当に気に入っていたらしく、1913 年 7 月にはクルト・ヴォルフ出版社から書店の店頭配布された生前唯一の詩集である『詩集』

(Gedichte) に収録され、更に、1914 年 3 月から詩人によって用意され、残念ながら詩人の死の翌年、すなわち、1915 年に出版された詩集『夢の中のセバスティアン』(Sebastian im Traum) に再び収録された。³²⁾ 一方、詩 „Unterwegs“ は 1913 年 6 月 3 日以後から 15 日までの間に書かれ、³³⁾ それ故、『詩集』の収録には間に合わなかったが、『夢の中のセバスティアン』には収録された。

ここで注意しておきたいことは、詩集『夢の中のセバスティアン』における作品の掲載順番である。詩 „Kindheit“ から始まるその順番は、次のようになっている。

„Kindheit“、„Stundenlied“、„Unterwegs“、„Landschaft“、„An den Knaben Elis“

即ち、„Unterwegs“ と „An den Knaben Elis“ は „Landschaft“ を挿んで、連続しているのである。従って、„Laß, wenn“ という語法が両者において用いられても不思議はない。更に注目すべきは、詩 „Unterwegs“ と詩 „An den Knaben Elis“ の間に置かれ、わずかに 8 行からなる詩 „Landschaft“ である。

Septemberabend; traurig tönen die dunklen Rufe der Hirten
 Durch das dämmernde Dorf; Feuer sprüht in der Schmiede.
 Gewaltig bäumt sich ein schwarzes Pferd; die hyazinthenen Locken der Magd
 Haschen nach der Inbrunst seiner purpurnen Nüstern.
 Leise erstarrt am Saum des Waldes der Schrei der Hirschkuh
 Und die gelben Blumen des Herbstes
 Neigen sich sprachlos über das blaue Antlitz des Teichs.
 In roter Flamme verbrannte ein Baum; aufflattern mit dunklen Gesichtern die Fledermäuse.³⁴⁾

詩 „Landschaft“ は詩 „Unterwegs“ と詩 „An den Knaben Elis“ の橋渡しの役を果たしている。すなわち、「ずっと以前に過ぎ去った 11 月」(ein lang vergangener Novembertag) (Unterwegs V. 19) の「繰り返し思い出される夕方」(immer wieder kehrt dieser vergangene Abend) (Unterwegs V. 5)、あるいは、彼らが「異邦者を墓地へ運んだ」夕方 (Am Abend trugen sie den Fremden in die Totenkammer) (Unterwegs V. 2) を扱った詩「途上にて」(Unterwegs) が「もの悲しい」(traurig) 秋の初めの「9月の夕暮れ」(Septemberabend) の「風景」(Landschaft) を呼び起こし、それが詩 „Landschaft“ になり、更に、「ずっと以前に死んだエーリス」(wie lange bist, Elis, du verstorben) (V. 13) を扱った詩 „An den Knaben Elis“ の「没落」(Untergang) (V. 3) の背景として引き継がれている。それ故、詩 „Unterwegs“ と „An den Knaben Elis“ の間に、「異邦者」の死と「エーリス」の死、すなわち、「魂」の死 (Es ist die Seele ein Fremdes auf Erden)³⁵⁾ を共通項として、雰囲氣的に緊密性が感じられる。更にこの緊密性を高めているのが、詩 „Unterwegs“ で「夕暮れのヒアシンスの顔」(das hyazinthene Antlitz der Dämmerung) (V. 12)、詩 „Landschaft“ で「下女のヒアシンスの巻き毛」(die hyazinthenen Locken der Magd) (V. 4)、詩 „An den Knaben Elis“ で「お前の体はヒアシンスだ」(Dein Leib ist eine Hyazinthe) (V. 14) と使用されている „Hyazinthe“ である。„Hyazinthe“ はギリシア及び小アジアが原産で、原種の花の色は「薄青」(washy blue) であり、トラークルの場合重要な意味内容を持つ「青色」の一種と見なすことができる。³⁶⁾ 即ち、ヒアシンスの花によって象徴される「青色」が 3 つの詩の背景に共通項としてちりばめられているのである。³⁷⁾

更に、インスブルック版の考証によると、„An den Knaben Elis“ は 1913 年 4 月 1 日から 29 日の間に書かれた。³⁸⁾ 他方、„Unterwegs“ は 1913 年 6 月 3 日から 15 日の間に書かれた。³⁹⁾ すなわち、二つの作品は 2 ヶ月ほどの間に連続して書かれたのである。それ故、成立の時期の連続性も両詩の間の語法的類似性の誘因となっている、と考えることができる。このように連続した詩想を背景とした二つの詩 „An den Knaben Elis“ と „Unterwegs“ において „Laß, wenn“ という語法がほとんど連続して使用されているのであるから、これらの二つの „Laß, wenn“ がともに同じ用法であり、同じ意味でありうる可能性は非常

に高い。

ところで我々は、詩 „An den Knaben Elis“ において使用されている „Laß, wenn“ についてすでに別の機会において明らかにした。⁴⁰⁾ そこにおいて、8種類、ホルムート・栗崎・滝田訳 I と II、中村訳 I と II をそれぞれ一つとすれば、6種類の邦訳が全て誤解・誤訳であり、更にドイツ本国の7人の研究者中2人が解釈を誤り、5人が正しく解釈していることを明らかにしたが、ここでは、„Laß, wenn“ の正しい理解に至るために、その研究成果に基づきながら、新たな研究成果を取り入れて、再考したい。

IV-1

詩 „An den Knaben Elis“ の第2連のなかで、日本の研究者だけではなくドイツ本国の研究者を悩ませたのは „Laß“ と „blutet“ の用法であった。すなわち、„Laß“ の4格目的語はどれか、また自動詞 „blutet“ の後ろになぜコンマがないのか、と悩んだのである。プフィステラー＝ブルガーは次のように言っている。

Syntaktisch ist der Satz nicht eindeutig. Sind die Objekte *uralte Legenden* und *dunkle Deutung des Vogelflugs* dem *laß* oder den *blutet* zuzuordnen? Hat man zu lesen: Laß doch die Legenden und die Deutung des Vogelflugs, wenn deine Stirne blutet? Allerdings fehlte dann ein Komma nach *blutet*.⁴¹⁾

ここで歴代の邦訳⁴²⁾を参照すると次のようになる。

- 1) おまえの額がかすかに血を流すとき
太古の語り伝えや、飛ぶ鳥の
おぼろな占いなぞにはかかわってはいけない (吉村博次 I)
- 2) お前の額がそっと血を流す時
太古の伝説と
小鳥の飛翔の暗い意味は忘れよ。 (ホルムート・栗崎・滝田訳 I)
- 3) お前の額に血汐がにじむときは
古い昔のかずかずの物語も
空の鳥がえがく謎文字の暗い解きあかしも忘れ去るがよい。 (平井俊夫訳)
- 4) おまえの額がかすかに血を流すとき、
太古の伝説や、鳥の飛行の
おぼろげな占いなぞは捨てるがいい。 (吉村博次訳 II)

- 5) おまえの額がひそやかに血を流すとき
 太古の伝説は
 鳥の飛翔のさだかならぬ解釈はそのままにしておくがよい (畑 健彦訳)
- 6) そっとしておくがよい、お前の額が 静かに血を流すとき
 太古の伝説を
 鳥の飛翔の暗い意味を。 (中村朝子訳 I)
- 7) お前の額がそっと血を流す時
 太古の伝説と
 小鳥の飛翔の暗い意味は忘れよ。 (ホルムート・栗崎・滝田訳 II)
- 8) そっとしておくがよい、お前の額が 静かに血を流すとき
 太古の伝説を
 鳥の飛翔の暗い意味を。 (中村朝子訳 II)
- 9) お前の額がそっと血を流すとき
 太古の伝説と
 鳥の飛翔の暗い意味は忘れよ。 (瀧田夏樹訳)

これらの邦訳に共通している解釈は、プフィステラー＝ブルガーが危惧したとおりに、
 „wenn“ を「時」を示す従属接続詞とし、„blutet“ の後ろにテキストにはないコンマを補
 い、„blutet“ を自動詞とし、„Laß“ の4格目的語を „Uralte Legenden“ と „dunkle Deutung
 des Vogelflugs“ にする、というものである。しかしその結果、吉村博次訳 I・II と中村朝
 子訳 I・II では日本語として理解しがたい邦訳になり、平井俊夫訳と畑健彦訳では原
 文から離れて作文が行われている。また、ホルムート・栗崎・滝田訳 I・II と瀧田夏
 樹訳で使われている「忘れる」は „Laß“ の邦訳になり得るか、疑問が残る。

この疑問の解決に対して決定的な役割を果たしたのはトラークル自身の説明であった。
 すなわち、『詩集』の再校段階で、„blutet“ の用法に関して我々と同じ疑念を抱いた校正
 者によって詩人の意図は無視され、誤った解釈が行われ、„blutet“ にアンダーラインが
 引かれた。その上、この „blutet“ の用法について出版社からトラークルに手紙による問
 い合わせが行われたようである。⁴³⁾ 出版社の問い合わせに対してトラークルは次のよう
 に答えている。

Auf Ihre Anfrage teile ich Ihnen umgehend mit, daß die betreffende Stelle im
 Satz vollkommen richtig ist. Das „Laß“ hat hier die Bedeutung von „dulden“;
 deshalb ja kein Beistrich nach „blutet“. ⁴⁴⁾

現在、ザルツブルク版の注には、„blutet“ の後ろのコンマは「印刷ミス」(Druckfehler)⁴⁵⁾ である、と明記されている。また、インスブルック版の考証に従うと、「この箇所は、トラークルの解説と『詩集』における訂正にもかかわらず、『夢の中のセバステイアン』並びにカール・レルクによって出版された『全詩集』(Die Dichtungen)において誤解された。すなわち、„blutet“ の後ろにコンマが置かれた。(この誤りは 1938 年の „Die Dichtungen“ の新版においてようやく訂正された。)」⁴⁶⁾

しかし、„Uralte Legenden / Und dunkle Deutung des Vogels“ を目的語とする „blutet“ の他動詞の用法の説明は、現代の独和辞典にも、⁴⁷⁾ 更にドイツ本国の現代ドイツ語辞典にも同じく掲載されていない。⁴⁸⁾ しかし、多少古いドイツ語辞典を参照すると、その説明は次のように掲載されている。

1) Campe: Wörterbuch der deutschen Sprache (1807-1811)

als trs. bluten lassen, mit dem Blute von sich gehen. Dann schauerst du und blutest Freudenthränen. Schubart.

2) Grimm: Deutsches Wörterbuch (1854-1960)

Klopstock setzt bluten gern transitiv mit dem acc.:

... bey dem, der geblutet,

von der höhe des kreuzes herab, sein leben geblutet. (Messias 4-1008).

.....

auch Lessing 2, 105: bei dem blute, das ich gern für deinen vater geblutet.

3) Sanders: Wörterbuch der deutschen Sprache. (1876)

tr.: Etwas mit dem Blut, in dem Blut, — zuw. auch wie Blut — hinströmen lassen. ...

Wunden (Klopstock Messias 4, 1099), Todesangst (Klopstock Messias 5, 637), das

Leben (Klopstock Messias 8,92; 4, 1008), Gnade (Klopstock Messias 18, 284),

Freudenthränen (Schubart) bluten.

4) Heyne: Deutsches Wörterbuch. (1905-1906)

trans. nach Klopstocks Vorgange: die steigenden Adern bluten Todesangst

(Messias 5-637).

これらの辞書の説明から、„blutet“ を他動詞とする用法は、現代では多少古いですが、確かに存在し、文法的にも由緒正しい用法である。スウェーデン人のブラウは、グリムの『ドイツ語辞典』に言及して、次のように言っている。

Das Verb hat zwei Mitspieler, was in den neueren Wörterbuch nicht vorkommt,

denn in diesen wird *bluten* nur absolut aufgeführt. DWb. dagegen führt u. a. folgerndes an: „Klopstock setzt *bluten* gern transitiv mit dem accusativ“, ... Trakl schließt sich hier also einem älteren, dichterischen Sprachgebrauch an.⁴⁹⁾

このようにグリムの『ドイツ語辞典』まで参考にしたスウェーデン人のブラウは、語感の点ではかなり優れている出版社の校正人でさえも疑念を抱くほどトラークルの時代にはすでに古めかしい用法になっていた „blutet“ の他動詞の用法を正しく突き止め、誤解を回避することができた。しかし他方、多少古いこれらのドイツ語辞典を参照することを怠った日本の研究者達は全員、„blutet“ の後ろにコンマを補い、誤解・誤訳を犯してしまった。特に、ザルツブルク版が出版された 1969 年以後は、「„blutet“ の後ろのコンマは『印刷ミス』」であった、⁵⁰⁾ という注は翻訳に際して当然参照されて然るべきであったが、残念ながら反映されなかった。また、更に残念なことに、トラークルの当該の書簡も翻訳出版されたにもかかわらず、トラークル自身の説明は単に翻訳されただけで、詩 „An den Knaben Elis“ の邦訳には生かされなかった。⁵¹⁾ それほど日本のゲルマニストには „blutet“ の他動詞の用法は想定外なのであろうか。

IV-2

以上で、„wenn deine Stirne leise blutet / Uralte Legenden / Und dunkle Deutung des Vogels“ は正しく解釈されたが、それと同時に新たな問題が生じてくる。すなわち、それでは他動詞 „Laß“ の 4 格目的語はどれか、ということである。しかし、トラークル自身は、「„Laß“ はここでは „dulden“ の意味です」、といているのであるから、次に „Laß“ を調べなければならない。

いろいろ辞書を調べた結果、次の説明が我々にとって有益である。

zulassen, dulden, erlauben, daß etwas geschieht, daß jmd. etwas tut, nicht verhindern, daß etwas Bestimmtes geschieht, daß jmd. etwas tut.⁵²⁾

この辞書の説明は、「„Laß“ はここでは „dulden“ の意味です」とするトラークルの説明に語学的に正当な根拠を提供している。それ故 „Laß“ はあくまでも „dulden“ の意味に解釈せねばならない。そこで、独和辞典を調べてみると、„dulden“ は次のように説明されている：

- 1) 忍ぶ、耐える、しんぼうする；甘受する。（大独和辞典、博友社 1968 年）
- 2) 辛抱する、忍ぶ、耐える。（独和言林、白水社 1968 年）
- 3) 堪え忍ぶ、我慢する、辛抱する。（独和大辞典、小学館 1985 年）
- 4) 忍ぶ、耐える、辛抱する；甘受する（独和中辞典、研究社 1996 年）

これらの説明を勘案すると、「Laß」は「忍ぶ、耐える、堪え忍ぶ、我慢する、辛抱する、甘受する」と解釈され、邦訳されるのが妥当である。それではトラークルは少年エーリスに対して何を「堪え忍べ」と命令しているのであろうか。残っているのは、「wenn deine Stirne leise blutet / Uralte Legenden / Und dunkle Deutung des Vogelflugs」という「wenn」に導かれた副文しかない。しかし、ここで問題になるのは、従属接続詞「wenn」である。事実、9種類の邦訳ではこの「wenn」は全て一律に「時」を示す従属接続詞と解釈され、副詞節として訳出されている。他方、すでに明らかにされたように、「Uralte Legenden」と「dunkle Deutung des Vogelflugs」は「blutet」の4格目的語であるから、9種類の邦訳では、「Laß」の4格目的語が存在しないことになる。

IV-3

それではこの「wenn」は一体どのような機能を果たしているのであろうか。そこでドイツ語辞典を参照してみると、次の二冊に有益な説明が記載されている。

1) Grimm: Deutsches Wörterbuch (1854-1960)

zuweilen hat wenn den temporalen, konditionalen, konzessiven oder kausalen charakter weitgehend verloren und dient im wesentlichen dazu, eine tatsache anzuführen; gleich wie in den funktionsbereich von dasz hintübergreifend.

2) Klappenbach: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache (1964-1977)

unter der Bedingung, Voraussetzung, daß, falls ... das kommt davon, wenn man so gutmütig ist.

グリムの辞書の説明に従うと、「wenn」には「時を示す用法」、「状況を示す用法」、「認容を示す用法」、「因由関係を示す用法」以外に「名詞的副文を示す用法」もある。この用法について、古くは1928年にベハーゲルは既に次のように言っている。

*Diese scheinbar nicht mehr bedingende Sätze stammen aus einer Vermischung von *daz*-Sätzen mit bedingende Sätzen des Typus A II: *wenn das Urteil so mild ausgefallen ist, so kommt es daher* = *daß das Urteil so milde ausgefallen ist, kommt daher* + *wenn ein Urteil so milde ausfällt, so kommt es daher*.⁵³⁾*

また、近年では1971年にブリンクマンは次のように言っている。

*Wenn der Inhalt Gegenstand einer Stellungnahme ist, kann *wenn* für *daß* eintreten. ...
... und verargen Sie es mir nicht, wenn ich ... scheinbar von mir rede.⁵⁴⁾*

ペハーゲルとブリンクマンの説明を読むと、「wenn」が「daß」の代わりになる事は明らかであるが、グリムの辞書で分類されたどの用法でも「wenn」は「daß」の代わりになるのか、あるいは何か条件があるのか、ということは明示されていない。この問いに1988年にエンゲルは次のように答えている。

DASS: *Daß Sie doch noch gekommen sind, freut uns alle.*

OB: *Ob er noch kommt, ist mir gleich.*

WENN: *Mir ist es recht, wenn er kommt.*

.....

In solchen Aussagesätzen kann *daß* häufig durch *wenn* ersetzt werden, *wenn* nicht von einer Tatsache, sondern von einer bloßen Möglichkeit die Rede ist:

Daß du unterschreibst, genügt uns.

Wenn du unterschreibst, genügt es uns.

es ist im zweiten Fall jedoch obligatorisch.⁵⁵⁾

すなわち、エンゲルの説明に従えば、「wenn」が「daß」の代わりを果たすことができるのは、「wenn」が「可能性」を示す場合に限る。そこで、この説明に従って、「Laß, wenn deine Stirne leise blutet / Uralte Legenden / Und dunkle Deutung des Vogels」の暫定的試訳をあえて提示すれば、次のようになる。

おまえの額が静かに
太古の伝説と鳥の暗い意味を
血と共に流し出すことに、エーリスよ、耐えよ。

IV-4

ところで、「wenn」のこの用法は「An den Knaben Elis」において、それと認識されないが、実はもう一例ある。それは冒頭の2行である。

Elis, wenn die Amsel im schwarzen Wald ruft,

Dieses ist dein Untergang.⁵⁶⁾

この場合、「wenn die Amsel im schwarzen Wald ruft」を受けているのが、2行目の「ist」の主語である指示代名詞「Dieses」である。しかし、主語の役割を果たすことができる品詞は名詞以外にあり得ないから、当然「wenn die Amsel im schwarzen Wald ruft」は名詞の機能を果たす副文以外に解釈の可能性はない。それゆえ、この「wenn」は絶対に「daß」に代わる用法である、と言える。

そこで、この2行の歴代の邦訳⁵⁷⁾を参照すると、次のようになる。

- 1) 歌鳥が黒い林で招く時、エーリスよ
それがおまえの没落なのだ。(吉田・高本訳)
- 2) エリスよ 鶇が黒い森で叫ぶとき
これはおまえの没落なのだ。(吉村博次Ⅰ)
- 3) エーリス、くろうたどりが黒い森で呼べば、
それがお前のほろびの時。(ホルムート・栗崎・滝田訳Ⅰ)
- 4) エーリスよ つぐみが黒い森のなかで啼くとき
それはおまえの死の徴となる。(平井俊夫訳)
- 5) エーリスよ、鶇が黒い森で叫ぶとき、
これはおまえの没落なのだ。(吉村博次訳Ⅱ)
- 6) エーリスよ 濃く翳る森でくろうた鳥が啼くとき
これはお前の没落なのだ(畑 健彦訳)
- 7) エーリス、くろうたどりが 黒い森で呼ぶとき、
それが お前の没落だ。(中村朝子訳Ⅰ)
- 8) エーリス、くろうたどりが黒い森で呼べば、
それがお前のほろびの時。(ホルムート・栗崎・滝田訳Ⅱ)
- 9) エーリス、くろうたどりが 黒い森で呼ぶとき、
それが お前の没落だ。(中村朝子訳Ⅱ)
- 10) エーリスよ、黒つぐみが黒い森で叫ぶとき、
それが お前のほろびだ。(瀧田夏樹)

全ての邦訳において、指示代名詞 „Dieses“ は „wenn“ 以下の副文の内容を受けている。ただし、ホルムート・栗崎・滝田訳ⅠとⅡは、「・・・呼べば、それがお前のほろびの時」、と微妙な変化を付けている。そこで、『広辞苑』を参照すると、「ば」は「(接続助詞)・・・口語では假定形に接続して、仮定の条件を示す」、と説明されている。⁵⁸⁾ それゆえ、ホルムート・栗崎・滝田訳ⅠとⅡでは、„wenn“ は先ず「仮定の条件」を示す、と解釈され、更に、「時を示す副詞」の意味合いも加味されたようであるが、翻訳後の日本

語の操作に拘泥しすぎているように見える。

しかしいずれにせよ、「可能性」を示す „wenn“ のみが „daß“ の代わりになることができるのであるから、この „wenn“ を「時」を示す従属接続詞と解釈する限り、文法上、語法上、及び、翻訳上、十全さを欠いている。

このような十全さを欠く誤りを犯していない邦訳例を提示したい。それは、カフカの『変身』の次の箇所である。

Da sitzt er bei uns am Tisch und liest still die Zeitung oder studiert Fahrpläne. **Es ist schon eine Zerstreung für ihn, wenn er sich mit Laubsägearbeiten beschäftigt.**⁵⁹⁾

道楽と言え、あなた、鋸細工なんですからねえ。⁶⁰⁾ (高橋義孝訳)

糸鋸細工などいたしますのが、そんなことだけで、楽しみなのでございますねえ。⁶¹⁾
(川村・円子訳)

いずれの邦訳も、出来不出来は問題外とすると、„wenn“ を「時」を示す従属接続詞とせず、„wenn“ 以下を純然たる名詞節として訳出している。

以上の、„An den Knaben Elis“ の „Laß, wenn“ に関する論考から、„wenn“ は、「可能性」を表す場合に、„daß“ の代わりに用いることができる、そして、グリムと共に言えば、この „wenn“ は「名詞的副文を示す用法」である。

IV-5

次に、„An den Knaben Elis“ の „Laß, wenn“ に関して、ドイツ本国の研究者の見解を参考にしたい。

1) Regine Blass: Die Dichtung Georg Trakls. Von der Trivialsprache zum Kunstwerk.
Berlin (Erich Schmidt) 1968. S. 208.

Wenn man indessen das fehlende Komma nach „blutet“ berücksichtigt, ... liegt ebenso schlüssig die Version „zulassen“ nahe, ... Die Strophe wäre dann zu explizieren:
Bejahe dein Leiden, laß es geschehen, füge dich in dein Los.⁶²⁾

2) Erich Bolli: Georg Trakls (dunkler Wohllaut). Eine Beitrag zum Verständnis seines dischterischen Sprechens. Zürich u. München (Artemis) 1978.
Durch die Deutung des «Laß» im Sinne von «dulden» wird der Passionscharakter von Elis' Sterben noch vertärkt. **Elis soll es zulassen, sich nicht dagegen auflehnen, daß seine «Stirne» «Uralte Legenden / Und dunkle Deutung des**

Vogelflugs» «blutet», ...⁶³⁾

- 3) Kathrin Pfisterer-Burger: Zeichen und Sterne Georg Trakls Evokationen lyrischen Daseins. Salzburg (Otto Müller) 1983. S. 96.

Dulde es, wenn deine Stirne blutet von Legenden und Deutung des Vogelflugs. ... Laß es zu, ruft das lyrische Ich Elis zu, erdulde deinen Tod!⁶⁰⁾

これらドイツ本国の研究者の解釈において、“wenn“は「名詞的副文を示す用法」として理解されている。中でもボリは明確に“daß“を用いて書き換えている。それ故、これらドイツ本国のトラークル研究者の解釈に加えて、既に上で引用したカンペ、グリム、ザンダース、ハイネの辞書の説明と、ベハーゲル、ブリンクマン、エンゲルの文法学者の説明を勘案すると、“wenn“を「時を示す副詞」とする10種類の邦訳は、限りなく誤解・誤訳に近い、といえる。

そこで、これらドイツ本国の研究者達の、特にプフィステラー＝ブルガーの解釈を参考にすれば、我々は、“Unterwegs“の最終行を次のように言い換えることができる。

Laß, wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt.

→:Dulde es, wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt.

V-1

ところでボリは、“Laß“を“Elis soll es zulassen“と言い換えているが、これを“Unterwegs“に当てはめると、“Elis“の代わりにどのような主語が入るべきなのか。これが最後に残された問題である。上で引用したプフィステラー＝ブルガーは、“An den Knaben Elis“の場合、エーリスに向かって“das lyrische Ich“が発した、と説明しているが、“Unterwegs“の場合はどうであろうか。

そこで先ず、インスブルック版に従って、“Laß“の推敲の後を辿ってみると、次のようになる。⁶⁵⁾

Textstufe 2H:	Laßt! Wenn betrunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt
Textstufe 3T:	Lasst, wenn betrunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt.
Textstufe 4D:	Lasst] Laßt
Textstufe 5D:	Lasst] Laß

即ち、明らかに最後に“Laß“になったのであるが、手書き第2原稿から印刷された再校に至るまでは“Lasst“または“Laßt“であり、命令が発せられる対象は、二人称の複数

„ihr“であった。そこで „Unterwegs“における登場人物を子細に調べてみると、次のようになる。この際に、最初に引用した „Unterwegs“ に付けられた番号を共に挙げておく。

第1連 1人称複数: 7) unser (ich und Schwester) Geschlecht

3人称単数: 2) den Fremden、3) eine Wache、4) die Schwester、
5) Schubert、6) ihr Lächeln (Schwester)、8) Jemand、9) jemand、
10) Großmutter

3人称複数: 1) sie (pl.) (人々)

第1連で、„ihr“の命令の対象を考えれば、重要なのは、4の „die Schwester“、6の „ihr“ (= Schwester)、7の „unser“ Geschlechtになる。そして、この„Geschlecht“に「妹」も属している、と考えることができる。それ故、„unser Geschlecht“とは、„Großmutter“も登場するが、先ず「妹」と「私」を合わせた「私たち」をここでは意味する、と理解することができる。

第2連 1人称単数: 14) auf meiner Stirne、16) auf mich

1人称複数: 11) unsere Schritt、

2人称単数: 12) zu deinen Füßen、13) Deine Lider、15) dein Antlitz

第2連で重要なことは、「妹」に対して初めて二人称単数 „du“ が用いられたこと、また、「詩中の主体」(das lyrische Ich) が初めて一人称単数 „ich“ として登場したことである。ここにおいて、„wir“ の構成が「妹」と「私」(das lyrische Ich) であることが、明確にされたのである。

第3連においては、„ihr“の対象とはならない呼びかけの „o Gott“ を除外すれば、不定代名詞の „man“ が一回限り使用されているのみである。ところで、この不定代名詞は、„ich“をも含めて、⁶⁶⁾ „die Leute allgemein, manche Leute, die Allgemeinheit“⁶⁷⁾を意味するのであるから、„Schwester“も „das lyrische Ich“も含めてこの „man“によって、既に言及したトラークルにおいて顕著な「一般化」・「抽象化」⁶⁸⁾が行われたことになる。換言すれば、この „man“ は詩 „Unterwegs“において「一般化」・「抽象化」という重要な役割を果たしているのである。

第4連 1人称単数: an meinem Mund

第4連において、一度「一般化」・「抽象化」によって表面的には消えた „ich“のみが再登場してくるが、„Schwester“は消失されたままである。このことは、最終行において

詩人にとって „ich“ のみが問題である、ということを示している。

V-2

上の分析から次のように言うことができる。二人称として登場し、„ihr“ の命令の対象となることができるのは「俺」と「妹」以外にありえない。この結果と „Textstufe 2H“ から „Textstufe 4D“ までの „Laßt“ または „Lasst“ の推敲を総合すると、詩人は、先ず命令の対象として「おまえ」と呼ばれている「妹」と詩中の主体（das lyrische Ich）たる「俺」を念頭に置いていたが、熟考の末に、印刷する直前の最終段階（Textstufe 5D）で „Lasst“ を „Laß“ に推敲し、このことによって、命令の対象から「妹」を除外し、「俺」だけをその対象とした。このことは、「妹」だけは「滅び」または「退落」（in die Gosse sinkt）から救済したい、という詩人の淡い期待の表出と考えることができる。このように解釈すると、„Lasst“ の „Laß“ への推敲もよく理解できる。そこで、„Unterwegs“ の最終連をボリに従って書き換えれば、次のようになる。

O, wie dunkel ist diese Nacht. Eine purpurne Flamme

Erlösch an meinem Mund. In der Stille

Erstirbt der bange Seele einsames Saitenspiel.

Ich soll es zulassen, mich nicht dagegen auflehnen, daß trunken von Wein das
Haupt in die Gosse sinkt.

最終行において、せめて「妹」だけはこの「退落」（in die Gosse sinkt）から救済したいのは詩人たるトラークル自身である。それ故、この „soll“ の話者はトラークル自身であり、プフィステラー＝ベルガーと共に言えば、「詩中の主体」（das lyrische Ich）である。即ち、「詩中の主体」（das lyrische Ich）たる「俺」が「俺」自身に向かって「耐えよ」（Laß）と命じているのである。

VI

最後に „Laß, wenn“ にふさわしい邦訳を考えたい。我々は既に、„Laß“ は「忍ぶ、耐える、堪え忍ぶ、我慢する、辛抱する、甘受する」と解釈されるのが妥当である、としたが、Agricola の „Wörter und Wendungen“ に依ると、„dulden“ は „ertragen“ と „zulassen“ に大別される。⁶⁹⁾ そこで、„Unterwegs“ の „wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt“ の内容を考えてみ見ると、„An den Knaben Elis“ の „wenn deine Stirene leise blutet / Uralte Legenden / Und dunkle Deutung des Vogelflugs“ と同様に、そこに表現されているのはネガティブなものであり、„An den Knaben Elis“ の詩句を使えば、„dunkle Deutung“ である。この解釈の正当性を Brockhaus-Wahrig の

„dulden“ に関する次の説明が証明している。

etwas Unangenehmes dulden *ertragen, über sich ergehen lassen*; er duldet große Schmerzen; Leid und Not dulden müssen⁷⁰⁾

この説明に従えば、„Laß, wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt“ を我々は次のように書き換えることができる。

→ Ertrage, daß trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt.

次に、日本語の文法書を繙くと、「無標の無意思自動詞を述語とする文が可能の意味を帯びる場合がある」、⁷¹⁾ という見解が見いだされた。この見解に従って考えると、„wenn trunken von Wein das Haupt in die Gosse sinkt“ で使用されている „sinkt“ は、「泥酔」(trunken von Wein) が原因で、即ち、「詩中の主体」たる「私」の意思とは関係なく、「無意思」の中に „das Haupt in die Gosse sinkt“ という現象が生じるのであるから、「無意思自動詞」と言える。それ故、「無標の」、即ち、「可能」を表示する特徴的な言葉を持たなくても、⁷²⁾ 日本語文法における「無意思自動詞を述語とする文が可能の意味を帯びる場合がある」という説明は、「可能性」を表す „wenn“ の「名詞的副文を示す用法」にもふさわしい説明であり、我々はこの説明に従いたい。

また、小学館の『日本国語大事典』では格助詞「に」は「動作、態度のかかわる対象を表す」と説明され、その例文として、『徒然草』(150段)の次の例文が挙げられている。

いまだ堅固かたほなるより上手の中にまじりて、毀り笑はるるにも耻ず、つれなく過ぎて嗜む人⁷³⁾

即ち、格助詞「に」を用いることによって、„Laß“ と „wenn“ を結びつけることができるのである。

以上の論考から次のように言うことができる。即ち、„wenn“ は「名詞的副文を示す用法」であり、「可能性」を示す „wenn“ は「無標」で表現でき、„Laß“ と „wenn“ は格助詞「に」を用いて関連付けることができ、„Laß“ は „dulden“、即ち、„(dunkle Deutung) ertragen“ の意味である。

最後に、この結論に従って、試訳を提示し、結語に代えたい。

おお、今夜はなんと暗いことか。深紅の炎が
俺の口もとで消えた。静寂の中で

怯える魂の絃楽は止む。

お前、耐えよ、泥酔して下水溝の中へ顛倒するに。

註

- 1) R・シフェール 「フランスで能を研究する意義」〔『世界の中の能 -Noh in the World- 法政大学第四回国際シンポジウムの記録』野上記念法政大学能学研究所編〕法政大学出版局 1979 年、38-39 頁。(アンダーラインと太字は伊藤)
- 2) Der Duden in 10 Bänden. Etymologie. Herkunftswörterbuch der deutschen Sprache. Bd. 7. S. 376.
- 3) Georg Trakl: Dichtung und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe in 2 Bdn. Hrsg. von Walther Killy und Hans Szklener. Salzburg (Otto Müller) 1969, Bd. I, S. 81 (HKA I); Vgl. Georg Trakl: Sämtliche Werke und Briefwechsel. Innsbrucker Ausgabe. Historisch-kritische Ausgabe mit Faksimiles der handschriftlichen Texte Trakls. Hrsg. v. Eberhard Sauer mann und Hermann Zwerschina. Band II. Dichtungen Sommer 1912 bis Frühjahr 1913. Basel; Frankfurt am Main (Stroemfeld/Roter Stern) 1995. S. 471 f. (IA II)
- 4) Der Duden in 10 Bänden. Stilwörterbuch der deutschen Sprache. Bd. 2. 7. Aufl. Mannheim / Wien / Zürich (Dudenverlag) 1988. S. 441.
- 5) ゲオルク・トラークル 『詩集 夢の中のセバスチアン』(吉田 清・高本研一訳)、〔世界名詩大成8 ドイツ編Ⅲ〕(訳者代表 手塚富雄) 平凡社、1959、1967 年、72 頁。
- 6) ゲオルク・トラークル 『トラークル詩集』(平井俊夫訳) 筑摩書房、1967 年、121~123 頁。
- 7) ゲオルク・トラークル 『詩集 対訳』(ノルベルト・ホルムート、栗崎 了、滝田夏樹訳) 同学社、1967 年、131/133 頁。
- 8) ゲオルク・トラークル 『詩集 対訳』(ノルベルト・ホルムート、栗崎 了、滝田夏樹訳) 同学社、再版、1985 年、131/133 頁。
- 9) ゲオルク・トラークル 『トラークル全詩集』(中村朝子訳) 青土社、1983 年、43 頁。
- 10) ゲオルク・トラークル 『トラークル全集』(中村朝子訳) 青土社、1987 年、43 頁。
- 11) ゲオルク・トラークル 『トラークル詩集』(瀧田夏樹訳) 小沢書店、1994 年、76~77 頁。
- 12) 広辞苑 新村 出編、第 2 版 岩波書店、1969 年、2180 頁。
- 13) 広辞苑、1673 頁。
- 14) 次の独和辞典を参照: 相良守峯 大独和辞典、博友社、1968 年、1675 頁; 佐藤通次 独和言林、白水社、1968 年、1461 頁; 岩崎英二郎・小野寺和夫 ドイツ語不変化詞辞典、白水社、1969 年、591~2 頁; 国松孝二・他 独和大辞典、小学館、1985 年、2527~8 頁; 相良守峯監修 独和中辞典、研究社、1996 年、1579~8 頁。
- 15) 広辞苑、1712 頁。

- 16) 広辞苑、434 頁。
- 17) 日本国語大辞典 第2版 第9巻 小学館、2001年、509 頁。
- 18) 広辞苑、1712 頁。1509 頁。
- 19) 古語辞典 大野晋、佐竹昭広、前田金五郎編 岩波書店、1974年、1143 頁。
- 20) Vgl. Br. a. Buschbeck v. Spätherbst(?) 1911. HKA I, S. 485; IAV.1. S. 174.
- 21) 広辞苑、449 頁。
- 22) 日本国語大辞典 第2版 第8巻 小学館、2001年、9523 頁。
- 23) 広辞苑、1313 頁。
- 24) 日本国語大辞典 第2版 第8巻 小学館、2001年、473 頁。
- 25) 広辞苑、1684 頁。
- 26) 日本国語大辞典 第2版 第8巻 小学館、2001年、443 頁。
- 27) 広辞苑、2180 頁。
- 28) 広辞苑、86 頁。
- 29) 広辞苑、2280 頁。
- 30) 日本国語大辞典 第2版 第13巻 小学館、2002年、479 頁。
- 31) HKA I, S. 26 u.84.
- 32) Vgl. Otto Basil: Georg Trakl. (Rowohlt) Reinbeck bei Hamburg 1965. S. 160f.
- 33) IAII, S. 471.
- 34) HKA I, S. 83.
- 35) HKA I, S. 141.
- 36) Encyclopaedia Britannica. Vol. 11. London, Chicago, Toronto 1938. S. 954.
- 37) 伊藤卓立 トラーケルの blau について -1912年から1913年春まで- [トラーケル研究 第七号] 2010年、16 頁参照。
- 38) IAII, S. 427.
- 39) IAII, S. 427, 471.
- 40) 伊藤卓立 トラーケルの詩「少年エーリスに寄せて」I -翻訳・誤解・誤訳-、
[日本大学農獣医学部一般教養 研究紀要 第28号] 1992年、73-81 頁。
- 41) Kathrin Pfisterer-Burger: Zeichen und Sterne. Georg Trakls Evokationen
lyrischen Daseins. Salzburg (Otto Müller) 1983. S. 96-7.
- 42) 当時参照することができた邦訳は下記の通り：
- *ゲオルク・トラーケル (吉村博次訳) [世界詩人全集 第六巻 二十世紀詩集(下)]
河出書房、1956年、285 頁。
 - *ゲオルク・トラーケル「詩集 対訳」(ノルベルト・ホルムート、栗崎 了、滝田夏
樹訳) 同学社、1967年、120 頁。
 - *ゲオルク・トラーケル「トラーケル詩集」(平井俊夫訳) 筑摩書房、1967年、114 頁。
 - *ゲオルク・トラーケル「トラーケル詩集」(吉村博次訳) 彌生書房、1968年、89 頁。

- *ゲオルク・トラークル「トラークル詩集 原初への旅立ち」(畑 健彦訳) 国文社、1968年、39頁。
- *ゲオルク・トラークル「トラークル全詩集」(中村朝子訳) 青土社、1983年、43頁。
- *ゲオルク・トラークル「詩集 対訳」(ノルベルト・ホルムート、栗崎 了、滝田夏樹訳) 同学社、1983年(再版)、120頁。
- *ゲオルク・トラークル「トラークル全集」(中村朝子訳) 青土社、1987年、43頁。
このたび次の邦訳が新たに加えられた：
- *ゲオルク・トラークル『トラークル詩集』(瀧田夏樹訳) 小沢書店、1994年、79頁。
対象としたドイツ本国の研究書は下記の通り：
- *Clemens Heselhaus: Die Elis-Gedichte von Georg Trakl. In: DVjs. 28 (1954). S. 391ff.
- *Klaus Simon: Traum und Orpheus. Eine Studie zu Georg Trakls Dichtungen. Salzburg (Otto Müller) 1955. S. 113.
- *Regine Blass: Die Dichtungen Georg Trakls. Von der Trivialsprache zum Kunstwerk. Berlin (Erich Schmidt) 1968. S. 208.
- *Erich Bolli: Georg Trakls <dunkler Wohllaut>. Ein Beitrag zum Verständnis seines dichterischen Sprechens. Zürich u. München (Artemis) 1978. S. 115.
- *Kathrin Pfisterer-Burger: Zeichen und Sterne. Georg Trakls Evokationen lyrischen Daseins. Salzburg (Otto Müller) 1983. S. 96.
- *Gunther Kleefeld: Das Gedicht als Sünde. Georg Trakls Dichtung und Krankheit. Eine psychoanalytische Studie. Tübingen (Niemeyer) 1985. S. 347.
- 以上のドイツ本国の研究者の中で誤った解釈をしたのは、Simon と Blass である。
- 43) Vgl. IAV.2, S. 445. „Er (Brief, der über eine Stelle im Gedicht An den Knaben Elis Auskunft erhalten wollte) ist verschollen.“
- 44) HKA I, S. 518.
- 45) HKA II, S. 145.
- 46) IAV.2, S. 447-8.
- 47) 注 13 を参照。
- 48) 次の辞書を参照：
- * Trübners deutsches Wörterbuch. Hrsg. v. W. Mitzka. 8 Bde. Berlin 1939-57.
- * H. Paul: Deutsches Wörterbuch. 6. Aufl. 1966.
- * G. Wahrig: Deutsches Wörterbuch. Gütersloh 1975.
- * Mackensen: Deutsches Wörterbuch. München 1977.
- * Ullstein. Lexikon der deutschen Sprache. Frankfurt / Berlin 1969.
- * Duden. Deutsches Universalwörterbuch. Mannheim 1983.
- * Duden. Stilwörterbuch der deutschen Sprache. (Der große Duden Band 2). 6. Aufl. 1971.
- * E. Agricola: Wörter und Wendungen. 6. Aufl. 1962.
- * Klappenbach: Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache in 6 Bdn. Berlin 1964-77.
- * Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache in 6 Bdn. Mannheim 1976-81.

- * Brockhaus-Wahrig: Deutsches Wörterbuch in 6 Bdn. Wiesbaden/Stuttgart 1980-84.
- * G. Kempcke: Handwörterbuch der deutschen Gegenwartssprache in 2 Bdn. Berlin 1984.
- * Knaurs großes Wörterbuch der deutschen Sprache. Erarbt v. U. Hermann. München 1985.
- 49) Anna Britta Blau: Stil und Abweichungen. Einige syntaktisch-stilistische Merkmale in den Dichtungen D. v. Lilienclons, G. Trakls und Ingeborg Bachmanns. Uppsala (Acta) 1978. S. 47.
- 50) HKA II, S. 145.
- 51) 『トラークル全集』(中村朝子訳)、43頁、892頁を参照。
- 52) Brockhaus-Wahrig: Deutsches Wörterbuch in 6 Bdn. Vierter Band. Wiesbaden / Stuttgart 1982. S. 407.
- 53) Otto Behaghel: Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung. Bd. III. Satzgebilde. Heidelberg (Carl Winter) 1928. S. 347.
- 54) Henning Brinkmann: Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung. Düsseldorf (Schwann) 1971. 654.
- 55) Ulrich Engel: Deutsche Grammatik. Heidelberg (Julius Groos) 1988. S. 244.
- 56) HKA I, S. 84.
- 57) 注 42 を参照。
- 58) 広辞苑、1756 頁。
- 59) Kafka: Die Verwandlung. In: Kritische Ausgabe. Drucke zu Lebzeiten. Hrsg. v. W. Kittler, H.-G. Koch, G. Neumann. Frankfurt a. M. (Fischer) 1994. S. 126.
- 60) 高橋義孝訳、カフカ全集Ⅲ 新潮社 1953/1967 年、61 頁。
- 61) 川村・円子訳、決定版カフカ全集 1 新潮社、1992 年、53 頁。
- 62) Regine Blass: Die Dichtung Georg Trakls. Von der Trivialsprache zum Kunstwerk. Berlin (Erich Schmidt) 1968. S. 208.
- 63) Erich Bolli: Georg Trakls (dunkler Wohllaut). Eine Beitrag zum Verständnis seines dichterischen Sprechens. Zürich u. München (Artemis) 1978. S. 115.
- 64) Kathrin Pfisterer-Burger: Zeichen und Sterne Georg Trakls Evokationen lyrischen Daseins. Salzburg (Otto Müller) 1983. S. 96.
- 65) IA II, S. 478-82.
- 66) Agricola, S. 417.
- 67) Brockhaus-Wahrig 4. Bd., S. 752.
- 68) 注 20 を参照。
- 69) Agricola, S. 175.
- 70) Brockhaus-Wahrig, Bd. 2, S. 308.
- 71) 日本語文法事典 日本語文法学会編 大修館書店、2014 年、123 頁。
- 72) 同上、651 頁参照。
- 73) 日本国語大辞典 第 2 版 第 10 卷